

思い出

※暴力

腹が痛くて目が覚めた。見上げると、薄笑いを浮かべた男が、自分の腹を踏みつけている。懸命に離そうとしたのだが、何故だか布団の中から腕が出せない。

すると苦しいか、と聞き慣れた声があった。低く地を這うようだが、それでいて耳触りが良い。間違えなくアパートの隣室の幼馴染だった。ナツメ球のわずかな明かりで、かろうじて顔が分かった。

理由を尋ねる余裕はなかった。奴は人の腹を踏むだけに飽き足らず、その足を更に奥へぐりぐりとめり込ませたのだ。

「痛いか」

今度は、ぼそりと耳元で囁かれる。そんなこと、訊かれるまでもない。やめて欲しいという気持ちを込めて、唯一動かせる首を縦に大きく振った。

奴はそうか、と言った途端、首筋に噛みついた。やっと腹が解放されたのに、今度は皮膚の切れる感触に意識を飛ばすかと思った。

つい先日、一緒に旅行したばかりだったのだ。その位には、親しいつもりでいたのだが。

「なん、で」

どうにか痛みを堪えて、息も絶え絶えに尋ねると、急に奴の顔つきが変わった。眉根を寄せ、目つきが陰しくなる。口元は微笑んだままだ。無理やり笑おうとしているみたいな表情。

暗がりで見えれば、奴の唇は血に濡れて、幽かに光っていた。鉄の臭いが、鼻をついた。

「お前のせいだよ、分かるか」

てんで心当たりはないので、まだ痛くて力の入らない首を懸命に横に振る。

すると、そこに奴の冷たい手が伸びた。手つきが急に優しくなって、不気味だった。散々痛めつけておいて、怪我を気遣うような触れ方なのだ。そのまま無言でハンカチを押し当て丁寧に血を拭いた。

「おやすみ」

拭き取ってから、いつも通りの口調で奴が言った。気が済んだようにみえたので、ほっとしたら身体の力が抜けて、すぐに寝てしまった。

翌朝、目が覚めた時にはもう幼馴染はいなくなっていた。まるで夢のようだった。だが首筋にはあの歯形が確かに残っている。頭を動かすとじくじくとそこが痛んだ。

理由を知るのは恐ろしかったが、改めて話を聞いた方が良さそうと思った。休日だから、時間はあった。顔を洗ってすぐ、すっかりくたびれたジーンズを履き、そのままサンダルを突っかけ、隣のインターホンを押した。息を殺して待っていると、後ろから大家の年配の女性に声をかけられた。

「この方お知り合いですか？」

これから強盗でもするつもりなのか、とでも言わんばかりに彼女は訝しげに訊いた。幼馴染だと答えると、機関銃のように早口でまくしたてた。

「それなら、家賃払うように伝えてくれないかしら。期限は昨日までだったんだけど、直接声かけても電話してもでなくてね。今日仕方がないから鍵で開けようとしたんだけど、開かないのよ。何かあったんじゃないかって。今ちょうど警察呼ぼうかと思ってたの。でも出来ればあまり大ごとにしたくないわ。通報する前にもう一回声かけてほしいの」

「そうなんですか。妙だな。じゃあ、何かあったら取り敢えずご報告しますよ」

「お願いしますね」

そそくさと廊下の掃除に戻っていく彼女を尻目に、本当にあいつはどうしたのかと思った。とにかく真面目な性格で、間違っても期限に遅れるなんてことはなかったのだ。高校生の時も提出物を遅らせたことは一度もない。そういう奴だった。

しばらく待っても出てこないの、もう一度インターホンを押した。だが、反応はなかった。

今度はドアを叩いてみたが、やはり反応はなかった。こんな朝早くに外出しているとは思えなかった。まだ寝ているのかもしれない。それとも本当に何かあったのか。事件にまきこまれたのか、あるいは。

おれは裏から回って、窓を見上げた。灯りは点いていない。目を凝らすと、曇りガラスの向こうに朧げに縄か紐のようなものが見えた。

そこには、ちょうど人間ぐらいの大きさのものがぶら下がっていた。

急いで表に戻って、ドアに力いっぱい体当たりした。

飛び込むと、暗い部屋に力なく頭を垂れた男が縄一本で揺れていた。舌がだらしなくたれ下がり、目は虚ろで完全に光を失っている。念のため脈を確認したが、意味はなかった。

警察を呼んでから、大家は心底困惑している様子だった。自分の管理するアパートで、自殺者が出るなんて想像していなかっただろう。多くの人にとって事故物件なんてテレビの向こうの出来

事だ。
遺書はなく、自殺の原因は判然としなかった。奴はきっと昨日のうちに決断していたのだ、と心苦しかった。夜のうちに事情を聞いておけばこんなことにはならなかったかもしれない。奴は両親を亡くしていたし、親戚とも付き合いがなかったので、遺体は俺が引き取ることになった。なまじ幼馴染みだっただけに、このまま無縁仏にするのも忍びなかったのだ。霊安室で横たわる身体は白く蠟人形のように、妙に現実味がなかった。無駄を好まなかった男の、数少ない遺品を眺めていると、後ろで控えていた警察官が口を開いた。

「佐原さんの死亡推定時刻は、昨日の午前8時から午前10時だったんですがね。隣に住んでいてお気づきにならなかったんですか」

遺品の中には、俺と旅行した時の写真があった。

(了)

アダジオ

※ややグロい

一

私は平生それを猫と呼んでいました。漱石よろしく猫、と呼べば決まってにゃあ、と寄ってききました。猫はよく人見知りをしました。私以外の者には、いっこうに懐こうとしないのです。いやむしろ、私にすら懐いていなかったのかもしれませんが。私を主人と思っているのではなく、ただ気のおける使用人だと思っていたのかもしれませんが。それが猫たる者の性質なのでしょうか。生物に関してこと暗い私には実際のところは分からないのですが、そんな気がしています。

猫の関心ごとと言えは専ら食事でありつけるかどうか、その一点につきましました。彼に支給されるのは、悪く言えば私の残飯でありました。近所のスーパーは、あまり独り身にやさしくありません。たいてい1人分というには少し多い分量の惣菜ができてしまいます。本に載っていた猫が口にしても平気だという食材を使い、それを与えていました。時々余ったパンなどを牛乳に浸してやると、猫はうまそうにそれを気のすむまでぴちゃぴちゃ舐めていました。

アパートの隣人は私が猫を飼い始めてから変わったと言いました。お前そんなに気の利くやつじゃなかったろう、と。それに対し私はただ一言そうですか、と答えました。彼はしばしば勝手に私の部屋に上がりこみました。その都度、気の弱い私は文句の1つも言えずただ2人分の茶を用意してそうですか、と答えるのです。そういうやり取りを猫は鳴きもせず黙って見つめていました。気づかぬうちにそれは恒のこととなっていました。猫はその隣人にも懐いていないようでした。彼がオイ、と呼びかけてもどこ吹く風でした。私は隣人に詫言いました。彼はしょうがないなと苦笑するだけでした。何分相手は犬畜生ならぬ猫畜生でしたし、例の嫌いのことも彼はよく知っていたからです。

二

ある時から、猫が帰ってこなくなりました。初めはいつもの、どこぞの裸の大将のような放浪癖だと思ったのですが、3日も戻ってこないのです。さすがに心配になりました。同時にいやな予感がしました。いつぞや聞いたことがあるのです。猫は己れの死期を悟ると、どこか主の知らないところで死のうとするらしいと。

歩いて15分ほど先の空き地の前で、猫はなぜか、口——と思しきところ——から泡を吹き、元の形が分からないくらい無惨な姿で死んでいました。乾いた道路の上に、腐りかけの身体がぐったりと横たわっていました。馬鹿なやつだ、と思いました。大方、車の前に飛び出しでもしたのだ、と。しかし、妙だとも思いました。亡骸のそばに、なにか腐った肉きれのようなものが、缶詰とともに転がっていたのです。どうやらそれは猫の好物のようでした。

私は家に帰って、しばしばんやりして、そして泣きました。さりとして、先ほどのことは胸の内のどこかで引っかかっていた。それから以前よりぼんやりすることが増えたので、そういう私を例の隣人はまた猫を飼えばいい、などとししばしば慰めてくれました。なるほど、そうなのでしょう。新たに猫を飼えば、その埋め合わせができるかもしれない。しかしそれはあの「猫」ではありません。あいつではないのです。隣人の知り合いのものだという上等な毛並みの猫の子は、確かに同じ黒猫なのに、「猫」とはまるで違っていました。予想以上に私は意気阻喪していました。私はいつまでもあの猫を恋しく思いました。お金を戴いている以上仕事には出ていましたが、休みの日はひたすら籠り、何かするとしても本を読むぐらいで、殆んど動きませんでした。食もだいが細りました。

「そんな調子じゃ痩せるぞ」

いくら慰めても塞ぎこんでいた私を見かねたのか、隣人は手ずから料理をこしらえ、以前にも増して私の家にちょくちょく顔を出すようになりました。隣人の料理の腕はなかなかのものでした。定食屋などやらせたら儲かるのではないか、と思われる程です。私はすっかり彼に甘えて料理をろくすっぽ作らなくなりました。終いには、洗濯や部屋の掃除といった身の回りの家事までしてもらおうようになりました。

三

そんな時私は彼の部屋に珍しく招かれました。彼が用を足している隙に、私は純粋な好奇心から

、机上の引き出しを開けました。それは3段から成り、2段目までは上から順に、文房具一式、便箋・封筒一式が揃えてありました。一番下の引き出しは、少し錆びた黄金色の缶からです。その隣にはラベルの文字が薄れて判別できない、農薬のような臭いがする何かの薬瓶が1つ入っていました。一通り確認した私はある仮説をたてました。隣人が猫を殺めたのではないか。私には心当たりがありました。以前に住んでいた借家での話です。その時から人と進んで交流をしない種類の間人であったのですが、どういうわけか時々、ダイレクト・メールに混じって、端正な字で綴られた手紙を受け取ることがありました。今時珍しく万年筆か硝子ペン、それも古きよき没食子酸のインキで丁寧にしたためられた手紙です。数少ない友人たちの中に手紙を書く習慣のある者はいなかったの、誰から送られたのか見当が付きませんでした。切手も住所もなかったの、恐らく直接投函したの、でしょう。内容は恋文でした。初めこそ、色恋沙汰にはまるで縁遠いこの私にもとうとう春が来たかと思いましたが、硬質の文体からしてどことなく女性ではない、という印象を受けました。差出人はいつも記されておらず、届くたびに薄気味悪く思っていました。というの、恋文の内容は届くたびに、貴方の仕事場にいる女たちを排除したいだとか、自分の邪魔になる者は消したい、などと、常軌を逸したものになっていったからです。

このアパートに引っ越してからも手紙はちよくちよく届いていましたが、猫が行方不明になる前、「あれは貴方をただの使用人だと思っている。貴方に相応しくない。あの無礼な猫はいずれ私が殺しましょう」などと書かれた手紙が投函されていました。馬鹿げていると思いましたが、それまで手紙の内容が実行されたこともなかったの、です。しかし、ただ一笑に付してしまうにはあまりにも不気味で、隣人にも相談していました。

今、引き出しに入っていた質のいい紙の便箋と封筒は、その手紙と全く同じもの、です。寒気がしました。黄金色の缶からの中には、案の定私に宛てた手紙が沢山入っていました。飛んで火にいる夏の虫、出す前に私の方から上がりこんだの、ですから、手紙が溜まっているのは当然といえばそう、でしょう。三好有助様、三好有助様、三好有助様、三好有助様。ずらりと並んだ端正なその文字に私は身震いしました。

そして気がつけば背後に当の本人が立っていました。

「何だ、見たのか」

隣人の取り澄ました笑みを私は凝視することしかできませんでした。目を離すことができなかつた、と言う方がより正確かもしれませぬ。平生の暢気な男はそこにはいませんでした。満面の笑みなのに、他人をおびえさせる何かがありました。

「お前さ、他人ん家の引出しを勝手に漁っちゃ駄目だろうよ」

もはや逃げ場はどこにもありません。私は壁を背にして立っていましたし、唯一の出入り口は彼の逞しく大きな背によって塞がれていました。無駄なことだと知りながら必死に平静をよそおい、私は何ごともなかったかの、ように帰ろうとしましたが、彼は黙ってつるりとした白壁まで私を追い詰めました。壁のひやりとした感触がこれは夢ではないと告げていました。彼はそのまま私の顎を長い指でつかみ、顔を無理やりぐいと上げさせました。それから彼は私の眼鏡をそっと外し、私の目だまを舐りました。私は再び慄然とし、声も出ませんでした。そんな状態では、脱出の方法を思案することなど到底できませんでした。

そこから先の記憶はあまり定かではありません。確かなことは、彼が私の首もとに噛み痕を残したことです。それは今もじくじくと痛んでいます。

(了)